

# 複文で用いられる接続副詞“还”

横関 里美

## 0. はじめに

筆者は、本論において、現代中国語の“还”構文は含意 (implication) 関係を表わすことにより、その中で用いられる接続副詞“还”は文と文を関係付ける役割を担う「含意記号」であることを主張する。

上記の発想は、沈家煊 (2001) の『跟副词“还”有关的两个句式』に端を発する。氏は、認知意味論の観点から“还”構文中の“还”は話者の主観的な態度を示すこと、及びその具体的な性質を明らかにした。そこで、筆者は氏の記述を根拠として、形式意味論の観点から客観的に分析し、含意関係を明示する。

## 1. “还”構文の成立

沈家煊 (2001:483) によれば、話者の主観的な態度を示す (メタ言語増量を表わす) 副詞“还”は複文で用いられる。“还”が現れる文型は以下の二種類がある。

文型 1: 「……还……呢, 别提/何况/更……了。」

(……さえ……だから, ……なんて言わずもがなである。)

文型 2: 「连/居然……, 亏你 (亏他) /想不到还……呢。」

(……さえ……である, その上……かい (なんて)。)

(沈家煊……………)

沈家煊 (2001:483) の記述を根拠に上の二つの文型の構成過程を明らか

にしてみよう。文型1の成立ちは次のとおりである。

初めに、後ろの小文で表わされている事態が存在する。話者は、その事態の情報だけでは量が不足しており、相手に与える印象も薄いと感じた。そこで、情報量を増やす為に、前提に基づいて、情報度が最も高い事態を前置詞“连”によって捉え、最低条件に提示させた後、その文を“还”によって接続し、推論形式を作り出した。

一方、文型2の成立ちは以下のとおりである。

初めに、前の小文で表わされている事態が存在する。話者は、前提に基づいて、その情報度が最も高い事態を前置詞“连”によって捉え、最低条件に提示させ、[非難]あるいは[皮肉]を表わす文を作った。さらに、小文で述べた非難あるいは皮肉の理由となる情報を“还”を用いて接続し、提供した。

また、この二つの文型は三つの共通点がある。

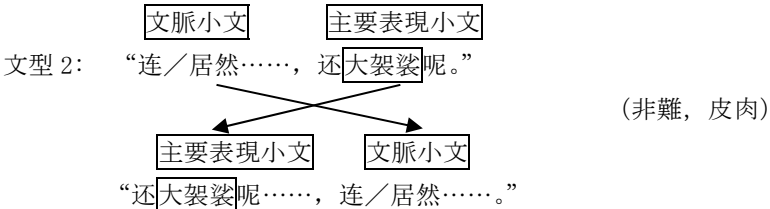
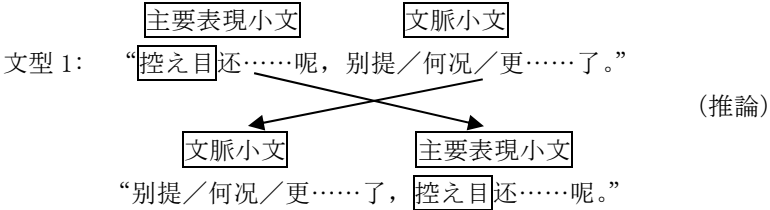
一点目は、前の小文が“连”構文によって構成されているという点である。二点目は、接続副詞“还”が用いられているという点である。文型1は前の小文に、文型2は後ろの小文に置かれている。三点目は、含意関係があるという点である。

以上の三つの共通点から分かることは、接続副詞“还”は“连”構文と共同で含意文を作り出す機能を備えているということである。事態を“连”によって解釈しただけでは含意文を作ることはできない。文型1であるならば、前の小文に“还”を加える。文型2であるならば、後ろの小文に“还”を加える。そうすることで“连”構文から含意文を生み出すことができるのである。よって、文型1と文型2における“还”は命題と命題の含意(implication)関係を表わす表現であると言える。

ここで、沈家煊氏による文型1と文型2に関する定義を概括しておこう。

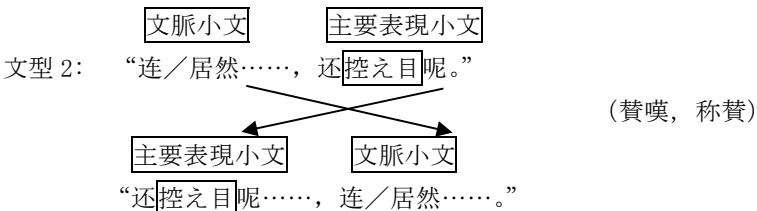
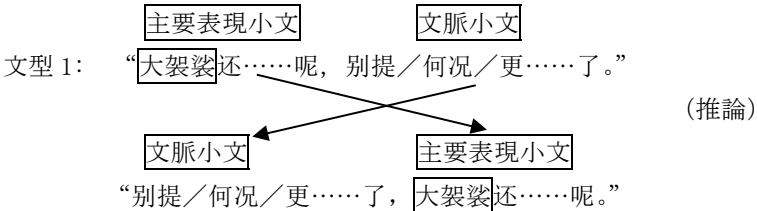
沈家煊(2001:484)は、下記のとおり、文型1と文型2の“还……呢”がある小文を「主要表現小文」、 “还……呢”がない小文を「文脈小文」と称した。また、否定文の場合、文型1の主要表現小文の名詞句は「控え目」に、文型2の主要表現小文の名詞句は「大袈裟」に言う必要があるとも述べる。

[否定文]



上記のとおり、主要表現小文と文脈小文の位置は交換でき、その上、意味は基本的に変わらないと指摘している。また、否定文を肯定文にする場合、下記のとおり、句型 1 の主要表現小文の名詞句は「大袈裟」に、句型 2 の主要表現小文の名詞句は「控え目」に言わなければならない。肯定文にすると、句型 1 は依然として推論関係を表わすが、句型 2 が表わす意味は [非難], [皮肉] の意から [賛嘆], [称赞] の意に転換した。

[肯定文]



沈家煊（2001:484）は、文型1の主要表現小文と文脈小文は、それぞれ対応する「意味焦点成分」があり、その焦点成分が存在する命題は一方通行の含意関係<sup>1</sup>を構成すると指摘している。一方、文型2の主要表現小文と文脈小文は、文型1のように対応する意味焦点成分はないが、文脈小文と主要表現小文から成る複合命題と文脈小文の間は含意関係があると述べている。そこで、筆者は、形式意味論の手法である命題論理と述語論理を運用して、“还”構文の意味を記述し、含意関係の明晰化を試みる。

## 2. 「含意文」

### 2.1. 否定文の場合

初めに分析する文は、文型1によって構成され、主要表現小文が否定文になる含意文である。（中国語の左上の記号“ˊ”は発音の強勢を示す。以下これに倣う。）

- (1) ˊ小车还通不过呢，就别提大车了。

（小型車でさえ通れないのだから、大型車など言わずもがなである。）

- (2) 连ˊ平面几何还没学过呢，何况解析几何？

（平面幾何も習っていないのだから、解析幾何はなおさらじゃないか？）

- (3) 连ˊ五千米还跑不了呢，一万米就更不行了。

（五千メートルさえ走り切れないのだから、一万メートルなんてなおさら無理である。）（沈家煊 2001:483）

事態を文型1によって把握する前に、話者と聴者は互いに前提を持っている。前提は文脈知識である時もあれば、一般知識である時もある。

- (1) から (3) の前提は以下のとおりである。

---

<sup>1</sup> 沈家煊は、含意 (entailment) 関係があると述べる。しかし、命題と命題の関係を取り扱っているので、筆者は、含意 (implication) 関係があると考える。以後、含意関係があるという前提の基に論を展開する。

車の大きさの基準:一定の大きさの空洞は,小型車は大型車より通過しやすい。

課程の程度の基準:幾何を学ぶ時,平面幾何は解析幾何より先に学ぶ。

ジョギングの長さの基準:一定の体力は,五千メートルは一万メートルより走り切りやすい。(沈家煊 2001:485)

沈家煊(2001:486)の記述に基づき,語用論の観点から,これらの文の意味を説明しよう。

話者は,既に話し合われて双方とも受け入れた文脈命題 q (1)は「大型車は通れない」,(2)は「解析幾何を習っていない」,(3)は「一万メートルを走り切れない」が提供する情報量が不足しているので,情報度が比較的高く,量が足りる主要表現命題 p (1)は「小型車でさえ通れないのだから」,(2)は「平面幾何も習っていないのだから」,(3)は「五千メートルさえ走り切れないのだから」を提供した。主要表現命題 p を提供した後,再び文脈命題 q を述べる必要はなくなった。(1)“就别提大车了”)主要表現命題 p を受け取った後,文脈命題 q を受け取ってもうそれ以上,言う必要がない。(2)“何况解析几何”,(3)“就更不行了”)

次に,形式意味論の観点から(1)の意味を解釈してみよう。

(1)の主要表現小文の前置詞“连”は「～ガ～サエ～トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「～ガ～トイウコトヲデキル」と「小型車が通る」と「小型車が通過する」という命題内容を規定している。一方,文脈小文の副詞“别”は「～ガ～トイウコトニ及バナイ」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「～ガ～トイウコトヲ提起スル」と「～ガ～トイウコトヲデキル」と「大型車が通る」と「大型車が通過する」という命題内容を規定している。

従って,この文の論理式は以下のとおりである。

~サエ

通ル ~ガ 通過スル ~ガ

(1') Lián' [xiǎochē, 小车, 一得' {小车, 通' (小车) & 过' (小车)}]  
 ナイ デキル ~ガ ~トイウコトヲ  
 アル ~ガ ~サエ ~トイウ状態ニ

通ル ~ガ 通過スル ~ガ

→ 別' [wǒ, 提' [wǒ, 一得' {大车, 通' (大车) & 过' (大车)}]  
 ナイ デキル ~ガ ~トイウコトヲ  
 提起スル ~ガ ~トイウコトヲ

及バナイ ~ガ ~トイウコトニ

(1') の前件中の“Lián' [xiǎochē, 小车, ……]”が「小型車が小型車さえ~という状態にある」の意味を, “一得' {小车, ……]”が「小型車が~ということをしてできない」の意味を, “通' (小车)”が「小型車が通る」の意味を, “过' (小车)”が「小型車が通過する」の意味を, 全体で“Lián' [xiǎochē, 小车, 一得' {小车, 通' (小车) & 过' (小车)}]”が「小型車が小型車さえ小型車が小型車が通る, かつ, 小型車が通過するということをしてできないという状態にある」の意味を表わしている。一方, 後件中の“別' [wǒ, ……]”が「私が~ということに及ばない」の意味を, “提' [wǒ, ……]”が「私が~ということをして提起する」の意味を, “一得' {大车, ……]”が「大型車が~ということをしてできない」の意味を, “通' (大车)”が「大型車が通る」の意味を, “过' (大车)”が「大型車が通過する」の意味を, 全体で“別' [wǒ, 提' [wǒ, 一得' {大车, 通' (大车) & 过' (大车)}]”が「私が私が大型車が大型車が通る, かつ, 大型車が通過するということをしてできないということをして提起するということに及ばない」の意味を表わしている。

上の含意形式の真理条件, 及び真理値表は以下のとおりである。(杉本 1998:75)

(一) 命題  $p \rightarrow q$  は命題  $p$  が偽であるか命題  $q$  が真の時真, それ以外は

偽となる。

(二)

p	q	$p \rightarrow q$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	1

(一) と (二) は (1') が記述する世界の在り方を捉えている。

具体的に述べると、①前件「小型車でさえ通れない」が成立し、後件「大型車など言わずもがなである」も成立する時、真である。②前件「小型車でさえ通れない」が成立し、後件「大型車など言わずもがなである」が成立しない時、偽である。③前件「小型車でさえ通れない」が成立せず、後件「大型車など言わずもがなである」が成立する時、真である。④前件「小型車でさえ通れない」が成立せず、後件「大型車など言わずもがなである」も成立しない時、真である。

## 2.2. 「皮肉を表わす含意文」

次に分析する文は、文型2によって構成され、文脈小文が否定文になる含意文である。

(4) 连这个字也不认得，亏你还上过`大学呢。

(この字さえ知らない、その上、君は大学に通ったのかい。)

(5) 英语都不会说，还在美国待了`五年呢。

(英語さえ話せない、その上、アメリカに五年住んだのかい。)

(6) 居然五千米都跑不了，还是`运动健将呢。

(なんと五千米メートルさえ走り切れない、その上、スポーツチャンピオンなのかい。)

(沈家煊 2001:483)

事態を文型2によって把握する前に、話者と聴者は互いに前提を持っている。

(4) から (6) の前提は以下のとおりである。

学歴高低基準:大学生は学歴が比較的低い人より知っている字が多い。

学習環境基準:アメリカに住んだことがある人は国内に住んでいる人より英語が上手である。

訓練程度基準:スポーツチャンピオンは一般人より五千メートルを走り切りやすい。(沈家煊 2001:488)

沈家煊(2001:488)の記述に基づき、語用論の観点から、これらの文の意味を説明しよう。

特定の発話環境の中で、話者は次のように考える。

既に談話によって双方とも受け入れた文脈命題  $p$  ((4) は「この字さえ知らない」、(5) は「英語さえ話せない」、(6) は「五千メートルさえ走り切れない」) が提供する情報量が不足しているため、また、主要表現命題  $q$  ((4) は「その上、君は大学に通ったのかい」、(5) は「その上、アメリカに五年住んだのかい」、(6) は「その上、スポーツチャンピオンなのかい」) を述べた。 $p \& q$  という複合命題は情報度が比較的高く、量が足りる情報を提供することができる。

次に、形式意味論の観点から (4) の意味を解釈してみよう。

(4) の文脈小文の前置詞“连”は「 $\sim$ ガ $\sim$ サエ $\sim$ トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「 $\sim$ ガ $\sim$ トイウ状態ニアル」と「君が字を認識する」という命題内容を規定している。一方、主要表現小文の副詞“亏”は「 $\sim$ ガヨクモ $\sim$ トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「君が通う」と「君が大学に至る」と「君が通う、かつ、君が大学に至ることが〔経験〕をする」という命題内容を規定している。

従って、この文の論理式は以下のとおりである。



~サエ

認識スル ~ガ ~ヲ

(4') 【连' [nī, 这个字, 一认得' {你, 认得' (你, 字)}]  
 ナイ アル ~ガ ~トイウ状態ニ  
 アル ~ガ ~サエ ~トイウ状態ニ

ヨクモ

通ウ ~ガ 至ル ~ガ ~ニ スル ~ガ

&亏' [你, 上' (你) &dào' (你, 大学) &有' {上' (你) &dào'

アル ~ガ

[経験] ヲ

(你, 大学), 过}}】

~トイウ状態ニ

~サエ

認識スル ~ガ ~ヲ

→ 连' [nī, 这个字, 一认得' {你, 认得' (你, 字)}]

ナイ アル ~ガ ~トイウ状態ニ

アル ~ガ ~サエ ~トイウ状態ニ

(4') の“连' [nī, 这个字, ……]”が「君がこの字さえ~という状態にある」の意味を, “一认得' {你, ……]”が「君が~という状態にない」の意味を, “认得' (你, 字)”が「君が字を認識する」の意味を, 全体で“连' [nī, 这个字, 一认得' {你, 认得' (你, 字)}]”が「君がこの字さえ君が君が字を認識するという状態にないという状態にある」の意味を表わしている。一方, “亏' [你, ……]”が「君がよくも~という状態にある」の意味を, “上' (你)”が「君が通う」の意味を, “dao' (你, 大学)”が「君が

大学に至る」の意味を，“有’ {上’ (你) & dào’ (你, 大学), 过}”が「君が通う，かつ，君が大学に至るということが〔経験〕をする」の意味を，全体で“亏’ [你, 上’ (你) & dào’ (你, 大学) & 有’ {上’ (你) & dào’ (你, 大学), 过}]”が「君がよくも君が通う，かつ，君が大学に至る，かつ，君が通う，かつ，君が大学に至るということが〔経験〕をする」という状態にある」の意味を表わしている。

上の連言形式の真理条件，及び真理値表は以下のとおりである。(杉本1998:72-73)

(一) 命題  $p \ \& \ q$  は命題  $p, q$  が同時に真であれば真，それ以外は偽となる。

(二)

p	q	$p \ \& \ q$
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	0

(4’ ) が記述する世界の在り方は次のとおりである。

①文脈命題「この字さえ知らない」が成立し，主要表現命題「君は大学に通ったのかい」も成立する時，真である。②文脈命題「この字さえ知らない」が成立し，主要表現命題「君は大学に通ったのかい」が成立しない時，偽である。③文脈命題「この字さえ知らない」が成立せず，主要表現命題「君は大学に通ったのかい」が成立する時，偽である。④文脈命題「この字さえ知らない」が成立せず，主要表現命題「君は大学に通ったのかい」も成立しない時，偽である。

この連言形式は文脈命題  $p$  を含意する。故に，含意形式の真理値表は以下のとおりである。

(三)

$p \ \& \ q$	$p$	$(p \ \& \ q) \ \rightarrow \ p$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	1

この条件から分かることは、①複合命題「この字さえ知らない、かつ君は大学に通ったのかい」が成立し、文脈命題「この字さえ知らない」も成立する時、真である。②複合命題「この字さえ知らない、かつ君は大学に通ったのかい」が成立し、文脈命題「この字さえ知らない」が成立しない時、偽である。③複合命題「この字さえ知らない、かつ君は大学に通ったのかい」が成立せず、文脈命題「この字さえ知らない」が成立する時、真である。④複合命題「この字さえ知らない、かつ君は大学に通ったのかい」が成立せず、文脈命題「この字さえ知らない」も成立しない時、真である。

### 3. 「含意文」

#### 3.1. 肯定文の場合

次に分析する文は、文型1によって構成され、主要表現小文が肯定文になる含意文である。

- (7) `大車还通过了呢，就别提小车了。  
(大型車でさえ通れたのだから、小型車など言わずもがなである。)
- (8) 连`解析几何还学过呢，何况平面几何？  
(解析幾何さえ習ったことがあるのだから、平面幾何はなおさらじゃないか？)
- (9) 连`一万米还能跑呢，五千米就更行了。  
(一万メートルさえ走れるのだから、五千メートルなんてなおさら大丈夫である。) (沈家煊 2001:484)

(7) から (9) の前提は上の否定文と同様である。

沈家煊 (2001:486) の記述に基づき、語用論の観点から、これらの文の

意味を説明しよう。

話者は、既に話し合われて双方とも受け入れた文脈命題 q ((7) は「小型車は通れた」、(8) は「平面幾何を習ったことがある」、(9) は「五千メートルを走れる」) は情報量が不足しており、また、意外性に欠けると感じた。そこで、意外性が比較的高く、量が足りる主要表現命題 p ((7) は「大型車でさえ通れたのだから」、(8) は「解析幾何さえ習ったことがあるのだから」、(9) は「一万メートルさえ走れるのだから」) を提供した。主要表現命題 p を提供した後、再び文脈命題 q を述べる必要はなくなった。((7) “就别提小车了”) 主要表現命題 p を受け取った後、文脈命題 q を受け取ってもうそれ以上、言う必要がない。((8) “何况平面几何”, (9) “就更行了”)

次に、形式意味論の観点から (9) の意味を解釈してみよう。

(9) の主要表現小文の前置詞“连”は「～ガ～サエ～トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「～ガ～トイウコトヲデキル」と「私が一万メートルを走る」という命題内容を規定している。一方、文脈小文の副詞“更”は「～ガナオサラ～トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「～ガ～トイウコトヲデキル」と「私が五千メートルを走る」という命題内容を規定している。

従って、この文の論理式は以下のとおりである。

～サエ

走ル ～ガ ～ヲ

(9') 连' [wǒ, 一万米, 能' {我, 跑' (我, 一万米)}]

デキル～ガ ～トイウコトヲ

アル ～ガ ～サエ

～トイウ状態ニ

ナオサラ

走ル ～ガ ～ヲ

→ 更' [wǒ, 能' {我, 跑' (我, 五千米)}]

デキル～ガ ～トイウコトヲ

アル ～ガ

～トイウ状態ニ

(9') の“连” [wǒ, 一万米, ……] が「私が一万メートルさえ～という状態にある」の意味を, “能” {我, ……} が「私が～ということができる」の意味を, “跑” (我, 一万米) が「私が一万メートルを走る」の意味を, 全体で“连” [wǒ, 一万米, 能” {我, 跑” (我, 一万米)}]” が「私が一万メートルさえ私が私が一万メートルを走るということができるという状態にある」の意味を表わしている。一方, “更” [wǒ, ……] が「私がなおさら～という状態にある」の意味を, “能” {我, ……} が「私が～ということができる」の意味を, “跑” (我, 五千米) が「私が五千メートルを走る」の意味を, 全体で“更” [wǒ, 能” {我, 跑” (我, 五千米)}]” が「私がなおさら私が私が五千メートルを走るということができるという状態にある」の意味を表わしている。

上の含意形式の真理条件, 及び真理値表は以下のとおりである。(杉本 1998:75)

(一) 命題  $p \rightarrow q$  は命題  $p$  が偽であるか命題  $q$  が真の時真, それ以外は偽となる。

(二)

p	q	$p \rightarrow q$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	1

この条件から (9') が表わす状況は, ①前件「一万メートルさえ走れる」が成立し, 後件「五千メートルなんてなおさら大丈夫である」も成立する時, 真である。②前件「一万メートルさえ走れる」が成立し, 後件「五千メートルなんてなおさら大丈夫である」が成立しない時, 偽である。③前件「一万メートルさえ走れる」が成立せず, 後件「五千メートルなんてなおさら大丈夫である」が成立する時, 真である。④前件「一万メートルさえ走れる」が成立せず, 後件「五千メートルなんてなおさら大丈夫である」も成立しない時, 真である。

### 3.2. 「賛嘆を表わす含意文」

次に分析する文は、文型2によって構成され、文脈小文が肯定文になる含意文である。

- (10) 连这个字都认得，你还只上过`小学呢。  
 (この字さえ知っている，その上，あなたは小学校に通っただけだなんて。)
- (11) 英语说得这么好，还从来没有`出过国呢。  
 (英語さえこんなに上手である，その上，今まで国を出たことがないなんて。)
- (12) 居然五千米跑第一，还从来没练过`长跑呢。  
 (なんと五千メートルさえ一番になった，その上，今まで長距離走を練習したことがないなんて。) (沈家煊 2001:484)
- (10) から (12) の前提は以下のとおりである。

学歴高低基準:小学生は学歴が比較的高い人より知っている字が少ない。

学習環境基準:国内に住んでいる人はアメリカに住んだことがある人より英語が下手である。

訓練程度基準:一般人はスポーツチャンピオンより五千メートルを完走し難い。

語用論の観点から説明すると、話者は、既に談話によって双方とも受け入れた文脈命題 p ((10) は「この字さえ知っている」、(11) は「英語さえこんなに上手である」、(12) は「五千メートルさえ一番になった」) の情報量が不足しており、また、意外性に欠けると感じた。そこで、主要表現命題 q ((10) は「その上，あなたは小学校に通っただけだなんて」、(11) は「その上，今まで国を出たことがないなんて」、(12) は「その上，今まで長距離走を練習したことがないなんて」) を説明した。従って、p&q という複合命題は意外性が比較的高く、量が足りる情報を提供することができる。

次に、形式意味論の観点から (12) の意味を解釈してみよう。

(12) の文脈小文の副詞「居然」は「～ガナント～トイウ状態ニアッタ」

という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「～ガ～サエ～トイウ状態ニアッタ」と「あなたが五千メートルを走る」と「あなたが五千メートルを走るが一番を得る」と「あなたが五千メートルを走るが一番を得ることが[完了]をする」という命題内容を規定している。一方、主要表現小文の副詞“从来”は「～ガイママデ～トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「～ガ～トイウ状態ニアル」と「あなたが長距離走を練習する」と「あなたが長距離走を練習することが[経験]をする」という命題内容を規定している。

従って、この文の論理式は以下のとおりである。

ナント

～サエ

走ル～ガ～ヲ 得ル ～ガ

(12') (《居然 [nī, Lián' [nī, 五千米 跑' (你, 五千米) & dé' {跑' (你, 五

アッタ～ガ～サエ

アッタ～ガ

～ヲ スル

～ガ

[完了] ヲ

米), 第一} & 有' [dé' {跑' (你, 五千米), 第一}, 1e] ]

～トイウ状態ニ

～トイウ状態ニ

今マデ

練習スル～ガ～ヲ スル

～ガ

[経験] ヲ

& 从来' [nī, 一有' [nī, 练' (你, 长跑) & 有' {练' (你, 长跑), 过}]] )

ナイ アル～ガ

～トイウ状態ニ

アル～ガ

～トイウ状態ニ

ナント

~サエ

走ル ~ガ ~ヲ 得ル ~ガ

→ 居然’ [nī, Lián’ [nī, 五千米, 跑’ (你, 五千米) & dé’ {跑’ (你, 五千

アッタ ~ガ ~サエ

アッタ ~ガ

~ヲ スル ~ガ [完了] ヲ

米), 第一} & 有’ [dé’ {跑’ (你, 五千米), 第一}, 1e]】

~トイウ状態ニ

~トイウ状態ニ

(12’) の “居然’ [nī, ……” が「あなたがなんと~という状態にあった」の意味を, “Lián’ [nī, 五千米, ……” が「あなたが五千メートルさえ~という状態にあった」の意味を, “跑’ (你, 五千米)” が「あなたが五千メートルを走る」の意味を, “dé’ {跑’ (你, 五千米), 第一}” が「あなたが五千メートルを走ることが一番を得る」の意味を, “有’ [dé’ {跑’ (你, 五千米), 第一}, 1e]” が「あなたが五千メートルを走ることが一番を得ることが [完了] をする」の意味を, 全体で “居然’ [nī, Lián’ [nī, 五千米, 跑’ (你, 五千米) & dé’ {跑’ (你, 五千米), 第一} & 有’ [dé’ {跑’ (你, 五千米), 第一}, 1e]】” が「あなたがなんとあなたが五千メートルさえあなたが五千メートルを走る, かつ, あなたが五千メートルを走ることが一番を得る, かつ, あなたが五千メートルを走ることが一番を得ることが [完了] をするという状態にあったという状態にあった」の意味を表わしている。一方, “从来’ [nī, ……” が「あなたが今まで~という状態にある」の意味を, “一有’ [nī, ……” が「あなたが~という状



態にない」の意味を，“练’（你，长跑）”が「あなたが長距離走を練習する」の意味を，“有’ {练’（你，长跑），过}”が「あなたが長距離走を練習することが〔経験〕をする」の意味を，全体で“从来’【ni，一有’ [ni，练’（你，长跑） & 有’ {练’（你，长跑），过}】”が「あなたが今まであなたがあなたが長距離走を練習する，かつ，あなたが長距離走を練習することが〔経験〕をするという状態にないという状態にある」の意味を表わしている。

上の連言形式の真理条件，及び真理値表は以下のとおりである。（杉本1998:72-73）

（一） 命題  $p$  &  $q$  は命題  $p, q$  が同時に真であれば真，それ以外は偽となる。

（二）

p	q	p & q
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	0

この条件から（12’）が表わす状況は，①文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」が成立し，主要表現命題「今まで長距離走を練習したことがないなんて」も成立する時，真である。②文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」が成立し，主要表現命題「今まで長距離走を練習したことがないなんて」が成立しない時，偽である。③文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」が成立せず，主要表現命題「今まで長距離走を練習したことがないなんて」が成立する時，偽である。④文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」が成立せず，主要表現命題「今まで長距離走を練習したことがないなんて」も成立しない時，偽である。

この連言形式は文脈命題  $p$  を含意する。従って、含意形式の真理値表は以下のとおりである。

(三)

$p \ \& \ q$	$p$	$(p \ \& \ q) \ \rightarrow \ p$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	1

この条件から分かることは、①複合命題「なんと五千メートルさえ一番になった、かつ今まで長距離走を練習したことがないなんて」が成立し、文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」も成立する時、真である。②複合命題「なんと五千メートルさえ一番になった、かつ今まで長距離走を練習したことがないなんて」が成立し、文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」が成立しない時、偽である。③複合命題「なんと五千メートルさえ一番になった、かつ今まで長距離走を練習したことがないなんて」が成立せず、文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」が成立する時、真である。④複合命題「なんと五千メートルさえ一番になった、かつ今まで長距離走を練習したことがないなんて」が成立せず、文脈命題「なんと五千メートルさえ一番になった」も成立しない時、真である。

#### 4. 「比喩文」で用いられる“还”

比較文は、副詞“更”あるいは“还”を用いて「程度の増加」を表わすことができるが、比喩文は、“还”だけしか用いることができない。なぜであろうか。沈家煊(2001:490)は、比喩文に“更”を使うことができず、“还”のみを使うことができる理由について「“还”は、メタ言語増量の用法があるからである。」と述べている。例えば、

(13) 小三儿高, 小三儿比`书架还高呢!

(三ちゃんが高い, 三ちゃんを本棚の高さに例えてしまうのだから!)

(沈家煊 2001:490)



いう状態にある」の意味を，“Bǎ’ [wǒ, 小三儿, ……]”が「私が三ちゃんに〜ということをもたらす」の意味を，“比’ {我, 有’ (小三儿, [个子<sub>1</sub>])}”が「私が三ちゃんの [高さ<sub>1</sub>] を例える」の意味を，“做’ {有’ (小三儿, [个子<sub>1</sub>]), 有’ (书架, [个子<sub>2</sub>])}”が「三ちゃんの [高さ<sub>1</sub>] が本棚の [高さ<sub>2</sub>] になる」の意味を、全体で“Lián’ 【wǒ, shūjià, Bǎ’ [wǒ, 小三儿, 比’ {我, 有’ (小三儿, [个子<sub>1</sub>])} & 做’ {有’ (小三儿, [个子<sub>1</sub>]), 有’ (书架, [个子<sub>2</sub>])}】”が「私が本棚さえ私が三ちゃんに私が三ちゃんの [高さ<sub>1</sub>] を例える、かつ、三ちゃんの [高さ<sub>1</sub>] が本棚の [高さ<sub>2</sub>] になるということをもたらすという状態にある」の意味を表わしている。一方、後件中の“有’ (小三儿, [个子<sub>1</sub>])”が「三ちゃんが [高さ<sub>1</sub>] を持つ」の意味を，“有’ ([个子<sub>1</sub>], 高)”が「[高さ<sub>1</sub>] が高いという性質を持つ」の意味を表わしている。

さらに、比較文の特徴として、三項の比較で“更”を用いることができるが、“还”は用いることができないという点が挙げられる。沈家煊 (2001:490) は、その理由についても「“还”は、メタ言語増量の用法があるからである。」と説明している。例えば、

(14) a. 长江比黄河长, 比淮河就更长了。

(長江は黄河より長いので、淮河より更に長い。)

b. \*长江比黄河长, 比淮河就还长了。(沈家煊 2001:490)

沈家煊 (2001:490) によれば、(14a) は比較を表わす前置詞“比”を使った純粋な比較文である。従って、ここでの“更”は「一般増量」を表わす。それならば、一般増量を表わす“还”も使えるのではなかろうか。なぜ、(14b) が非文法的な文になるのであろうか。その理由は、この文が複文になっているところにある。複文で“还”が用いられた場合、その“还”は一般増量用法ではなく、メタ言語増量用法になり、比喻文になるからである。

沈家煊 (2001:490) は、具体的に「(14b) が成立しない理由は、命題“长江比淮河长”は命題“长江比黄河长”の情報度の高さに及ばず、反対に低くなるからである。」と述べている。故に、下記のとおり、後ろの小文の情

報度を高くすれば (14b) は成立する。

(14b') 长江比淮河长, 比`黄河还长呢。

(长江は淮河より長い, 黄河の長さに例えてしまうのだから。)

(沈家煊 2001:490)

この文を沈家煊 (2001:490) の見解に基づき, 語用論の角度から説明しよう。

話者は文脈命題“长江比淮河长”が表現する事実に対して, 情報量が不足しており, また, 意外性に欠けると思った。よって, 主要表現命題“长江比黄河长”を補った。この主要表現命題は長江の長さに関する量が足りる情報を提供した。

次に, 形式意味論の角度から (14b') の意味を解釈してみよう。

文脈命題の前置詞“比”は「～ガ～ヨリ～トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「長江が [長さ<sub>1</sub>] を持つ」と「淮河が [長さ<sub>2</sub>] を持つ」と「[長さ<sub>2</sub>] と [長さ<sub>1</sub>] を比べる」と「[長さ<sub>1</sub>] が長いという性質を持つ」という命題内容を規定している。一方, 主要表現命題の前置詞“连”は「～ガ～サエ～トイウ状態ニアル」という意味を表わす真理関数である。この真理関数は「～ガ～ニ～トイウコトヲモタラス」と「私が長江の [長さ<sub>1</sub>] を例える」と「長江の [長さ<sub>1</sub>] が黄河の [長さ<sub>3</sub>] になる」という命題内容を規定している。従って, 論理式は以下のとおりである。

~ヨリ

モツ ~ガ ~ヲ モツ ~ガ ~ヲ

(14b”) 比’ [长江, 淮河, 有’ (长江, [长短<sub>1</sub>]) &有’ (淮河, [长短<sub>2</sub>]) &

アル~ガ ~ヨリ

比ベル ~ト ~ヲ モツ ~ガ ~ヲ

比’ ([长短<sub>2</sub>], [长短<sub>1</sub>]) &有’ ([长短<sub>1</sub>], 长)]

~トイウ状態ニ

~サエ

~ニ 例エル ~ガ ~ヲ

← Lián’ 【wǒ, Huánghé, Bǎ’ [wǒ, Chángjiāng, 比’ {我, 有’ (长江, [长短<sub>1</sub>])}

モタラス~ガ ~ニ

アル ~ガ ~サエ

ナル ~ガ ~ニ

&zuò’ {有’ (长江, [长短<sub>1</sub>]), 有’ (黄河, [长短<sub>3</sub>])}]】

~トイウコトヲ

~トイウ状態ニ

(14b”) の前件中の “Lián’ 【wǒ, Huánghé, ……” が「私が黄河さえ～という状態にある」の意味を, “Bǎ’ [wǒ, Chángjiāng, ……” が「私が長江に～ということをもたらす」の意味を, “比’ {我, 有’ (长江, [长短<sub>1</sub>])}” が「私が長江の [長さ<sub>1</sub>] を例える」の意味を, “zuò’ {有’ (长江, [长短<sub>1</sub>]), 有’ (黄河, [长短<sub>3</sub>])}” が「長江の [長さ<sub>1</sub>] が黄河の [長さ<sub>3</sub>] になる」の意味を, 全体で “Lián’ 【wǒ, Huánghé, Bǎ’ [wǒ, Chángjiāng, 比’ {我, 有’ (长江, [长短<sub>1</sub>])} &zuò’ {有’ (长江, [长短<sub>1</sub>]), 有’ (黄河, [长短<sub>3</sub>])}]】” が「私が黄河さえ私が長江に私が長江の [長さ<sub>1</sub>] を例える, かつ, 長江の [長さ<sub>1</sub>] が黄河の [長さ<sub>3</sub>] になるということをもたらすという状

態にある」の意味を表わしている。一方、後件中の“比”[长江, 淮河, …]が「長江が淮河より～という状態にある」の意味を, “有”(长江, [长短<sub>1</sub>])が「長江が[長さ<sub>1</sub>]を持つ」の意味を, “有”(淮河, [长短<sub>2</sub>])が「淮河が[長さ<sub>2</sub>]を持つ」の意味を, “比”([长短<sub>2</sub>], [长短<sub>1</sub>])が「[長さ<sub>2</sub>]と[長さ<sub>1</sub>]を比べる」の意味を, “有”([长短<sub>1</sub>], 长)が「[長さ<sub>1</sub>]が長いという性質を持つ」の意味を, 全体で“比”[长江, 淮河, 有’(长江, [长短<sub>1</sub>]) & 有’(淮河, [长短<sub>2</sub>]) & 比’([长短<sub>2</sub>], [长短<sub>1</sub>]) & 有’([长短<sub>1</sub>], 长)]”が「長江が淮河より長江が[長さ<sub>1</sub>]を持つ, かつ, 淮河が[長さ<sub>2</sub>]を持つ, かつ, [長さ<sub>2</sub>]と[長さ<sub>1</sub>]を比べる, かつ, [長さ<sub>1</sub>]が長いという性質を持つという状態にある」の意味を表わしている。

## 5. 「既実現の動作」を表わす“还”

“还”は「未然の事態の重複」を, “又”は「已然の事態の重複」を表わす。例えば,

- (15) a. 他昨天来过, 明天还来。 (未実現)  
 (彼は昨日来たが, 明日また来る。)
- b. 他昨天来过, 今天又来了。 (既実現)  
 (彼は昨日来たが, 今日また来た。)(沈家煊 2001:490)

(15a)の“还”は確かに“他明天来(彼は明日来る)”という未実現の動作の重複を表わしている。しかし、沈家煊によれば、時に“还”は既実現の動作の重複を表わす。

以下の例を見られたい。

- (15b’) 他昨天来过, `今天还来了呢。  
 (i. 彼は昨日来た, 今日でさえ来たのだから。)  
 (ii. 彼は昨日来た, その上, 今日来たのかい。)(沈家煊 2001:490)

上記のとおりメタ言語増量を表わす“还～呢”が用いられた場合、既実現の動作の重複を表わす。沈家煊(2001:490)の説明に従えば、この文は多義性があり、文型1としても文型2としても理解できる。文型1によって解釈した場合、この文の前提は「彼が明日来る可能性は、昨日来る可能

性の大きさに及ばない」である。故に、主要表現命題が伝達する意外性の度合いは文脈命題が伝達する意外性の度合いより高い。一方、文型2によって解釈した場合、話者は、文脈命題“他昨天来过”が提供する情報量が不足しているので、主要表現命題“他今天来了”を補った。文脈命題と主要表現命題から成る複合命題“他昨天过来&他今天来过”は意外性があり量が足りる命題である（沈家煊 2001:490）。

従って、この文の意味を形式化し、多義性をはっきりさせた結果は以下のとおりである。

来ル~ガ スル~ガ [経験] ヲ アル ~ガ [昨日]  
 (15b' - i) 来' (他) &有' {来' (他), 过} &有' [有' {来' (他), 过}, 昨天]

~サエ 来ル~ガ スル~ガ [完了] ヲ アル ~ガ  
 ← Lián' 【tā, 今天, 来' (他) &有' {来' (他), 了} &有' [有' {来' (他),  
 アッタ~ガ~サエ

[今日]  
 了}, 今天】  
 ~トイウ状態ニ

来ル~ガ スル~ガ [経験] ヲ アル ~ガ [昨日]  
 (15b' - ii) 【来' (他) &有' {来' (他), 过} &有' [有' {来' (他), 过}, 昨天]

来ル~ガ スル~ガ [完了] ヲ アル ~ガ [今日]  
 & 来' (他) &有' {来' (他), 了} &有' [有' {来' (他), 了}, 今天】

来ル~ガ スル~ガ [経験] ヲ アル ~ガ [昨日]  
 → 来' (他) &有' {来' (他), 过} &有' [有' {来' (他), 过}, 昨天]



## 6. 「累加」の意味を表わす“还”

沈家煊(2001:491)によれば、副詞“还”と“也”はどちらも動作の「重複」あるいは「継続」を表わすことができるが、“还”は必ず同一の動作主を指示しなければならない。

例えば、

- (16) a. 我白天想，晚上也／还想。  
(私は昼間思い，夜も／なお思う。)

- b. 你想去，我也／\*还想去。

(あなたは行きたい，私も行きたい。)(沈家煊 2001:491)

(16a)の前の小文“白天想”と後ろの小文“晚上想”の動作主はどちらも“我”である。従って，“也”と“还”のどちらを使っても問題はない。一方，(16b)は前の小文“想去”と後ろの小文“想去”の動作主は異なっている。よって，“还”は使うことができない。それならば，“还～呢。”形式は使えないのであろうか。沈家煊は使えると述べる。

以下の例を見られたい。

- (16b') 你想去，我还想去呢。

(i. あなたは行きたい，私でさえ行きたいのだから。)

(ii. あなたは行きたい，その上，私は行きたいなんて。)(沈家煊 2001:491)

沈家煊(2001:491)は、この文は文型1によっても文型2によっても理解できると述べる。よって、この文は多義性がある。文型1によって理解すると、前提は「私が行きたいという可能性は、あなたが行きたいという可能性より小さい」である。故に、“我想去”は“你想去”が提供する情報度より高い。文型2によって理解した場合、複合命題“你想去&我想去”を表現することは、命題“你想去”よりも意外性の度合いが高い(沈家煊 2001:491)。

従って、この文の意味を明示した結果は以下のとおりである。

行ク ~ガ

(16b' - i) 想' {你, 去' (你)}

シタイ ~ガ ~トイウコトヲ

~サエ

行ク ~ガ

← Lián' [wǒ, 我, 想' {我, 去' (我)}]

シタイ ~ガ ~トイウコトヲ

アル ~ガ ~サエ ~トイウ状態ニ

行ク ~ガ

行ク ~ガ

(16b' - ii) [想' {你, 去' (你)} &amp; 想' {我, 去' (我)}]

シタイ ~ガ ~トイウコトヲ シタイ ~ガ ~トイウコトヲ

行ク ~ガ

→ 想' {你, 去' (你)}

シタイ ~ガ ~トイウコトヲ

## 7. 命令文に対する「反響文」(echoing sentence) で用いられる“还”

沈家煊 (2001:491) は「重複であれ増補であれ命令文は“再”を用いることができるが“还”を用いることはできない。」と述べる。例えば、

(17) 唱了一个, 再唱一个! \*唱了一个, 还唱一个! (重複)

(一曲歌ったら, また一曲歌って!)

跳了一个舞, 再唱一首歌! \*跳了一个舞, 还唱一首歌! (増補)

(一回踊ったら, また一曲歌を歌って!) (沈家煊 2001:491)

命令文を発話することによって話者は[命令]という行為を行っている。この種の命令文は、小文の情報量を増やす役割を持つ“还”を用いることはできない。しかし、興味深いことに“还”構文は下記のとおり命令文に対する「反響文」で用いることができる。これも“还”は、メタ言語増量の性質があるからである (沈家煊 2001:491)。

- (18) a. (什么? 唱了一个) 还唱一个?  
 ((えっ? 一曲歌った) その上, 一曲歌うのかい?)  
 b. (什么? 跳了一个舞) 还唱一首歌?  
 ((えっ? 一回踊った) その上, 一曲歌を歌うのかい?) (沈家煊2001:491)

沈家煊(2001:491)によれば, “再”を用いた命令文は, 単に話者が動作を「重複」あるいは「増補」することを要求しているが, (18)の場合は, 命令文が表わす要求に対して主観的な態度を明らかにしており, 動作の重複と増補の必要はないと思っている。

(18)の意味を明示した結果は以下のとおりである。

歌ウ ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~ガ スル ~ガ [完了] ヲ  
 (18a') [唱' (wǒ, gē) &有' (gē, 一个) &有' {有' (gē, 一个), 了}

歌ウ ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~ガ  
 &唱' (wǒ, gē) &有' (gē, 一个)]

歌ウ ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~ガ スル ~ガ [完了] ヲ  
 → 唱' (wǒ, gē) &有' (gē, 一个) &有' {有' (gē, 一个), 了}

踊ル ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~ガ スル ~ガ [完了] ヲ  
 (18b') [跳' (wǒ, 舞) &有' (舞, 一个) &有' {有' (舞, 一个), 了}

歌ウ ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~ガ  
 &唱' (wǒ, 歌) &有' (歌, 一首)]

踊ル ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~ガ スル ~ガ [完了] ヲ  
 → 跳' (wǒ, 舞) &有' (舞, 一个) &有' {有' (舞, 一个), 了}

## 8. おわりに

以上、八種類の“还”構文の論理式を記述し、含意関係を明示した。分析の結果、“还”は文と文を接続する、言わば「接着剤」のような役割を果たすことが確認できた。分析をして行く中で、中国語は“还”以外にどのような含意記号があるのか興味が湧いた。従って、今後も中国語の含意文を追究して行きたい。

### 参考文献

- 方立 2000: 『逻辑语义学』, 北京语言大学出版社, 2000
- 原由起子 2002: 『中国語における修飾の様相』, 東方書店, 2002
- 吕叔湘 1980: 『现代汉语八百词』, 商务印书馆, 1980
- 沈家煊 2001: 跟副词“还”有关的两个句式. 『中国语文』2001年第6期
- 杉本孝司 1998: 『意味論 1—形式意味論—』, くろしお出版, 1998
- 杉村博文 1994: 『中国語文法教室』, 大修館書店, 1994
- 朱德熙 1982: 『语法讲义』, 商务印书馆, 1982
- 朱德熙 1995: 『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説—』, 杉村博文・木村英樹訳, 白帝社, 1995